

平成23年 2月 22日

平成22年度総研大全学教育事業実施報告書

|                    |                  |
|--------------------|------------------|
| 申請区分               | 総研大レクチャー         |
| プロジェクト名            | 学術映像の基礎—みる・つくる   |
| 申請代表者<br>(事業実施責任者) | 研究科：学融合推進センター 助教 |
|                    | 専攻：              |
|                    | 氏名：村尾静二          |

◆要旨

学術研究における映像の活用は、研究対象の把握をより具体的にし、新たな観点から研究対象を見直すことにつながり、研究を大いに促進させてくれる。また、最先端の研究成果を世界に示すうえでも重要な役割を持つ。本講座の目的は、受講生が（１）映像のリテラシー（映像を批判的に読み解き、使いこなすことのできる総合的な能力）を習得し、それを基礎に（２）映像の制作を自身の研究のなかに位置づけ、学術映像を完成することにある。平成21年度、継続的に開催してきた学術映像教育検討会（代表 野村雅一副学長）のメンバーを講師に迎え、講義と実習を通して「観る」「創る」リテラシーを体系的に指導することにより、学術研究に値する映像教育を実施した。

## ◆事業概要

### (1) 実施内容

名称：総研大レクチャー「学術映像の基礎 - みる・つくる」  
第一部「講義と実習」：平成 22 年 7 月 26 日（月）～30 日（金）  
第二部「成果の講評」：平成 22 年 12 月 2 日（木）～4 日（土）  
実施場所：総研大 葉山キャンパス

#### (1-1) 講師

村尾静二（総研大、学融合推進センター）代表責任者、講義・実習担当  
倉田智子（総研大、国立基礎生物学研究所）講義担当  
縣 秀彦（総研大、国立天文台）講義担当  
平田光司（総研大、先導研）講義担当  
内田順子（総研大、国立歴史民俗博物館）講義担当  
大森康宏（立命館大学、総研大・国立民族学博物館 名誉教授）講義担当  
南出和余（桃山学院大学）実習担当  
中村真里絵（国立民族学博物館）実習担当

#### (1-2) 受講生

受講生 10 名(映像制作の経験をもたない初心者から中級者まで、定員 6～10 名を募集したところ、10 名の学生から応募があった)。

総研大 文化科学研究科 比較文化学専攻 3 名（女 3 名）  
総研大 文化科学研究科 地域文化学専攻 2 名（男 2 名）  
総研大 先導科学研究科 生命共生体進化学 4 名（男 1 名・女 3 名）  
他大学 立命館大学大学院 先端総合学術研究所 1 名（女 1 名）

#### (1-3) 実施方法

第一部「講義と実習」の活動内容（7 月 26 日～30 日）：  
受講生は次のプログラムを受講するなかで、研究者の姿を、インタビュー、研究室や実験室等の研究環境、日々の研究活動から構成し、短編の映像作品にまとめた（撮影対象者として、先導研の颯田葉子先生にご協力いただいた）。プログラムの内容は次の通り。括弧内は担当講師。

講義：

「学術映像の基礎①②」（村尾静二）  
「自然科学・基礎生物学における学術映像の活用事例」（倉田智子）  
「文化科学・日本民俗学における学術映像の活用事例」（内田順子）  
「サイエンス・コミュニケーションにおける学術映像の活用事例」（平田光司）  
「自然科学・天文学における学術映像の活用事例」（縣 秀彦）  
「映像における芸術・思想の表現について」（大森康宏）  
「映画理論①フレーム論」（村尾静二）  
「映画理論②編集基礎」（村尾静二）

「上映：学術映像の鑑賞と解釈①②」（村尾静二）

実習：

「ビデオカメラの扱い方」（村尾静二、中村真里絵、南出和余、倉田智子）

「覚書の作成」（村尾静二）

「取材」（村尾静二、中村真里絵、南出和余、倉田智子）

「制作プランの検討」（村尾静二、中村真里絵、南出和余、倉田智子）

「撮影」（村尾静二、中村真里絵、南出和余、倉田智子）

「映像編集：紙上編集」（村尾静二、中村真里絵、南出和余、倉田智子）

「映像編集：ソフトの操作方法」（村尾静二、中村真里絵、南出和余）

「映像編集：全体構成の編集①②③」（村尾静二、中村真里絵、南出和余）

「映像編集：シーンの編集」（村尾静二、中村真里絵）

「映像編集：サウンドの編集」（村尾静二、中村真里絵）

「映像編集：仕上げ」（村尾静二、中村真里絵、大森康宏）

「完成作品の試写」（村尾静二、中村真里絵、大森康宏）

第二部「成果の講評」の活動内容（12月2日～4日）：

受講生は、第一部から第二部開催までのあいだに、第一部で習得した知識と経験をもとに、各自の研究活動をテーマとして短編の映像制作を制作した。第二部では、そのようにして出来上がった映像作品の上映と講評をおこない、必要に応じて再編集を実施した。

実習：

「完成作品の試写と講評」（村尾静二、大森康宏）

「映像作品の再編集」（村尾静二、大森康宏）

なお、第一部、第二部で使用した機材（ビデオカメラ6台、映像編集用パソコン10台、その他、関連機材）は、普段は総研大葉山キャンパスの村尾研究室で保管している。学生はそこで映像制作を進めることができ、遠方の学生に対しては機材を貸し出す体制を整えている。総研大レクチャーを開催するに際しては、受講生とともに機材をセミナー室（研究室と同じ校舎内にある）に運び、設置した。

## （2）成果

### （2-1）第一部「講義と実習」における成果

第一部では、撮影にご協力いただいた先生にも大いに助けられるなか、受講生は限られた時間のなかで3分前後の映像作品を完成した。撮影が散漫にならないように、撮影前には取材の時間をとり、その際、受講生には二つのことを指示した。まず、インタビューを通して撮影対象者を知り、自分の関心を明確にすること、そして、研究をささえるモノ、あるいは人とのかかわり方など、撮影対象者を取り巻く研究の現場のしっかりと観察すること、である。完成した作品は、技術的には初歩的なものであるが、各々が自分の関心に基づいて研究者の姿を描いており、映像を通して自分の考え方を表現するという最初の目標は達成できている。多くの受講生は、初めて学術映像を完成した。まずはこの事実を評価したい。

また、撮影対象者になっていただいた先生を招いて、一部の受講生と上映会を開催した。映像作品を撮影対象者とともに視聴し、議論する経験をもつことは、制作者の倫理観を養ううえでとても重要である。映像を通して自分が主張したいこと、そして、撮影対象者の人格を尊重すること、この二つの問題を映像制作を通して問い続けることは、学術映像における制作者倫理の基礎であり、受講生の映像作品はこの問題をしっかりと受けとめたものになっている。

## (2-2) 第二部「成果の講評」における成果

第二部では、現在までに受講生 10 名のうち 8 名が自分の研究、関心に基づいた映像作品を完成している。論文執筆と同様に、映像制作も信頼に足る映像を得るまでには長期の準備期間を要し、それを何度も視聴し、解釈し、編集を経て作品に仕上げていくまでには、さらなる時間が必要となる。したがって、まだ作品を完成できていない受講生もいるが、受講生はそれぞれの事情のなかで撮影対象と向き合っているため、制作の進度に差ができるのは仕方ないことである。

文化科学研究科に所属し文化人類学を専攻する受講生及び立命館大学から参加した受講生は、主に自分の調査地でフィールドワークを通して撮影してきた記録映像を編集して作品にまとめた。第一部から第二部開催までに新たにフィールドワークに向かい撮影した者もいれば、以前撮影したものの編集方法がわからず手つかずのままにしていた映像素材を新たに編集したものもある。文化人類学では、各研究者がそれぞれの調査地を持ち、長期間にわたって調査地の人々と信頼関係を築くなかで調査を進める。その研究成果を、論文（民族誌）だけでなく、映像により表現することは大きなメリットであり、また、映像を何度も視聴し、解釈することは、論文を書き進めるうえで様々な発見を導くものである。

一方、先端研に所属する受講生は、新入生が中心であり、まだ専門研究に入っていないために、自身の研究ではなく、総研大のなかで学生が主体となり開催している総研大ワークショップを主題にして映像制作を試みた。自然科学と文化科学の学生が集い、超領域による学際的研究の可能性をワークショップ形式で模索するこの試みは、文理融合を唱える総研大の理念を、学生の側から問い直すものである。複数の受講生による共同制作であり、ワークショップが進行する様子を複数の視点（ビデオカメラ）からの確に捉えており、映像制作の各過程がしっかりと練られていることを実感できる作品となっている。

第一部から第二部へと映像制作を進めていくなかで、受講生の学術映像に対する理解と経験は着実に深化しており、限られた時間のなかで、十分な成果を得ることができた。成果物としての映像作品は、制作者である受講生の承諾を得たうえで、上映会や総研大ホームページ上での閲覧等を通して、順次公開していきたい。

## ◆問題点と改善点

多くの受講生は、学術映像の制作において素人であるが、習得済みの知識及び経験は受講生によって様々である。実際、本年度の総研大レクチャーでは、多くの学生は初心者であったが、なかには基礎をすでに学び始めている学生もおり、講義と実習を両方のレベルに合わせて進めることもあった。次年度、開講する際には、初心者と、基礎編を受講済みの学生が同じクラスのなかに混在することになるために、新たな対応策が必要となる。これは、今後の事業展望と密接にかかわる問題であるために、その詳細に関しては事項で論じる。

## ◆今後の事業展望

研究者は、自分の考えや経験を文章化する能力に関しては、すでに長い年月をかけて養っている。一方、それを映像により考察し、表現することに関しては素人であることが多い。映像を通して知識を習得し、映像を通して自分を表現する度合いが増している現代社会において、その傾向は学術の領域でも顕著になりつつある。多くの研究者にとって映像は身近なものであるために、すでに映像のリテラシーを習得していると思いがちだが、日常生活と学術領域では、映像を使いこなすことにおいて異なる能力が求められる。そして、映像を学術研究に値するものとして使いこなそうとするなら、長期にわたる専門的な訓練が求められる。今回の総研大レクチャーで取り組んだのは、各受講生がその基礎を習得するためのものであり、それがより実践的な知識として受講生の思考に定着するには、さらに専門的なプログラムが必要となる。

このような理由から、次年度は、初心者を対象とした基礎編とともに、基礎編を習得した受講生を対象にして中級編のプログラムを開講する準備を進めている。基礎編と中級編のプログラムは、それぞれ次のような到達目標を定める。

### (1) 基礎編

映像制作の経験をもたない初心者を対象にして、映像制作プロジェクトの立案、覚書の作成、ビデオカメラ及び映像編集ソフトの基本的な操作方法、撮影及び編集の基礎（オート撮影、カット編集）、そして、完成作品の上映までを、実習を交えて講義する。受講生は、映像制作の各過程を基本に忠実に経験することにより、映像制作の基礎を習得することを目的とする。

### (2) 中級編

基礎編を習得した学生を対象として、各自が自分の研究テーマを映像化できるようになるまでを指導する。受講生は、撮影対象に効果的な撮影及び編集の手法（マニュアル撮影、応用編集）を理解し、空間軸と時間軸を効果的かつ構造的に映像化することができる。また、映像における音の役割を理解する。それにより対象を具体的かつ構造的に構成し、視聴者の感覚に響く映像作品の完成を目的とする。中級編を修了した受講生は、学会での映像発表や学術映像に関する公式の上映会に出品できる能力を習得することになる。

上級編に関しては、コンピューター・グラフィクス、三次元映像、高速度及び低速度撮影など、専門性の高い研究領域における映像制作になることが予測される。これに関しては受講生の希望や学術映像の動向を把握し、また、大学の枠を越えた学術映像の研究会を重ねていくなかで継続的に検討していきたい。